

東福岡高校という学校がある。いくつもの運動部が全国優勝を成し遂げる学校である。男子バレーボール部も今年1月の春高バレーで優勝している。だが、最初から強かったわけではない。そこには必ず指導者がいる。東福岡高校男子バレーボール部には、藤元聡一という指導者がいる。

藤元監督は、山口県の出身で、小学2年のときにバレーボールを始め、小・中・高校時代にはそれぞれ全国大会にも出場して、おぼろげながらゆくゆくは高校バレーの監督になりたいと思うようになっていた。東京の大学に進学してからもバレーボールは続けていたが、4年生になる前に行った春高バレー決勝戦で、日本一になったことがなかった岡谷工業高校（長野県）が初優勝を飾った。監督がもみくちやにされながら胴上げされた。その感動の様子を目の当たりにして「自分がやりたいのはこれだ」となった。

それで奮起し、4年生から教職課程に本気で取り掛かり、大学卒業の1年後に免許を取り終える。最初は山口県の公立高校の社会科の教師を目指したのだが採用試験はかなりの狭き門で、アルバイトの非常勤講師をしながら、3年間を掛けて北は山形から南は鹿児島まで私立高校ばかり42校を回る。

お金もなかったので、青春18きっぷを買って旅をし、車掌さんに「この地図にある高校は私立ですか」と聞いて、私立と分かったらそのまま履歴書を持っていった。届くのは不採用の通知ばかりだった。だが、とにかく全国のどこかの高校で指導者になりたかった。

そうやって3年後、ようやく受け入れてもらったのが東福岡高校だった。履歴書に「僕はバレーボールの指導者になりたい。必ず貴校を10年で日本一にします」と書いていたら、それをご覧になった理事長が「うちでできますか」と。「はい」と答えたら、3日後くらいに採用の通知がきた。だから、東福岡高校は、僕を拾ってくれた本当に神様のような存在なのだと藤元監督は言う。

藤元先生が赴任した当時の東福岡高校は県大会はおろか、地区大会で1～2回戦の状況だった。失うものは何もなかった。なおかつ41校不合格通知をもらった後の念願の高校バレーボールの指導者だったので、とにかく恩返しのため練習、練習、また練習の毎日だった。夜9時に体育館の電気が消えた後も、外のグラウンドに車を持ってきてライトをアップにして練習した。

当時は、短時間の集中練習のほうが効果的という流れがあったが、藤元監督は百本の集中より、千本やったほうが勝つと自分に言い聞かせて練習量で勝負した。これは26歳とまだ若かったからできたことかもしれないと藤元監督は言っている。

科学的と言われるいろいろな練習法を取り入れながら、飽きないように練習を工夫することも大切だが、飽きるほどの練習を飽きない心でやり抜く、ということのほうが、もっと大切だと身をもって学び、藤元監督なりのスタイルが確立されていく。いつしか隙が少ない、粘り強いチームに仕上がっていった。

苦しいときほど人間の本性が出る。藤元監督は、これを性根と言っている。苦しい場面に出くわしたときに、逃げる者、投げ出す者、嘘をつく者、人のせいにする者、グッと堪える者、いろいろだが、グッと堪えながらも周囲に対する慮りができてこそ周囲を感化できるし、そういう立ち居振る舞いができる人間を中心にチームの絆が生まれてくると藤元監督は言う。

バレーボールだけでなく、高校の運動部には、全国大会で優勝するような名将、知将、名監督がいる。きっと、それぞれの指導者には、名監督と言われるに至った数々のエピソードやドラマがあるはずである。強豪校と言われる学校でも、毎年、当たり前のように勝っているわけではない。そこには、必ず人間的に成長しようとしている指導者の存在がある。